

琉球弧の祭祀と行事【七】

来訪神からグソーまで 写真・文／木原盛夫



琉球弧の祭祀と行事【七】

米訪神からグソーまで 写真・文／本原盛夫

CONTENTS

来訪神	3P
神アシビ	16P
琉球弧の芸能1	31P
琉球弧の芸能2	42P
踊る島	50P
歌う島	64P
琉球弧の墓とグソー1	91P
琉球弧の墓とグソー2	102P
琉球弧・簡易年表	118P
聞得大君・きこえおおきみ	120P
参考文献	123P
琉球弧地図	134P
あとがき	136P
プロフィール	142P

【来訪神】

常世から、或は海の彼方にあるとされる理想郷＝ニライカナイから、季節毎に訪れる神を来訪神と言う。稀にしか来ないこの異界の神様を、人々はマレビトと称して信仰した。

八重山諸島で特に厚く信仰されている五穀豊穡をもたらすミルク神や、厄を祓い無病息災をもたらすとされる宮古島のパーントゥなど、来訪神の多くは仮面をつけ、異形の姿で祭場に登場する。

沖縄本島北部・安田集落で行なわれるシスグは、男たちが山に入り、草を身に纏って一日だけの神となり、村を祓って歩く。仮面こそ着けないが、彼らもまた宮古島のパーントゥと同じく来訪神ではないだろうか。

異形ではないが、粟国島で旧暦の大晦日から元旦にかけて行なわれるマースヤーで「これはここの子や孫たちを若返らせるお塩でございます。これはここのお爺さんお婆さんを若返らせるお塩でございます。これはここの火の神加那志を若返らせるお塩で

ございます」と口上を述べて家々をまわる塩売りも、来訪神と考えることはできないだろうか。

*マレビトの概念は民俗学者の折口信夫が定義したもので、日本の民族には村を訪れる神や異郷からの旅人を歓待し、その祝福を受ける信仰があった。小正月に出現するナマハゲ、海の彼方の常世または沖縄の他界、ニライカナイから来訪する祖霊や神がそれにあたり、各地を放浪する祝言職や乞食もマレビトの一種と考えられる。

5P上は、首里赤田のみるくウンケーに登場する、みるく。

5P下は、糸満市真栄里の大綱引きで、道ジュネーをする福祿寿。

6P上は、鳩間島の豊年祭にて。黄色い衣装が多い中、ブルーの衣装を纏ったミルクは珍しい。

6P下は、竹富島・種子取祭の舞台の芸能で登場する彌勒（ミルク）。子孫であるファーマーを大勢引き連れている。







7P上は、宮古島・鳥尻集落のパーントゥ。全身に塗った泥を付けてまわる事で、厄を祓う。
7P下は、パーントゥに襲われる交通整理のお巡りさん。8Pは、パーントゥ（鬼面）を被った少年が集落を祓って歩く、宮古島・野原集落のサティバロウ。





9Pは、沖縄本島の北部、安田集落のシスグ。身体に草を纏った男たちが、集落を載って歩く。

10Pも安田のシスグ。頭に藁縄を巻き、草やミーハンチャー（ゴンズイ）の赤い花を飾って、一日だけの神となった男の子。

11Pは、八重山の旧盆に行なわれるアンガマ。グソーからお面を被ったウシュマイ（翁）とンミー（媼）が来て、先祖の霊を慰める。石垣島のいしゃなぎら青年会のウシュマイとンミー。12-13Pは、仏壇の前で踊る登野城青年会のウシュマイとンミー。



12

13



14P上は、粟国島のマースヤーにて用意されたお盆に塩の山を3つ置き、お神酒をいただく浜集落・めー組みの塩売り。14P下は、粟国島・首里福原の塩売り。ミルクにも変身する（15P）。

【神アシビ】

アシビは、遊び（アソビ）。

琉球弧の祭祀は、神様をお迎えする神事後、祭場となる御嶽や神アサギに面した「ミヤー」や「ナー」と呼ばれる神の庭で踊りや歌が奉納され、神々と共食する。

祭祀の重要な部分は神に祈りを捧げる場面だが、祭祀の中心となるのは集落の人々が神と共に遊ぶ「神アシビ」だとも言える。

多良間島の八月踊りは、古くは皆納祝いと呼ばれており、まだ人々が人頭税に苦しんでいた時代、神に人頭税を納め終えた喜びを報告するとともに、翌年の豊作を祈願したと言う。この祭りの行なわれる期間だけは、人々は日常を忘れて踊り歌い、そして普段は口に出来ないご馳走を楽しんだ。

「野遊・もうあしび」という古くからの風習もある。大勢連れだって三線や太鼓を持って野に出たり、浜辺に出て円陣をつくって激しくうたい踊る。

とりわけ月のよい夜などは、夜ふけまで、男女いりまじって歓楽した。ちょうど古代の歌垣そのままの、素朴なロマンティズムである。この自由な風俗に対して為政者は、お目附役を置いて抑えようとしたり、しばしば禁止令を出したが、ごく近年までさかんだった。今でも行なわれている「三月遊び」はその名残りだという。

「沖縄文化論 忘れられた日本／岡本太郎」より。

旧暦の3月3日。奄美ではサンガツサンチ（サンガツ節句）と呼ばれ、一年の無病息災を願ってハマオレ（浜下れ）を行なう。

昔はみんな一重一瓶を持って浜に行き、貝採りをしたり唄を歌ったそうだ。

琉球弧ではアシビというハレの時間と空間が、今も脈々と受け継がれている。

18P上下は、渡名喜島のシマノーシ。御願の後、殿で接待を受ける神人と、神人と共食する人々。





19-21Pは、久高島の八月マティ。神事の後、祭場である久高御殿庭で子供たちが舞踊を奉納。男たちは夜遅くまで神の庭で酒宴を行っていた。

22-24Pは、竹富島の種子取祭。世持御嶽の舞台を、大勢の観客が囲んでいる。舞台の袖では、出演者が化粧や着替えて大忙しだ。





25-27Pは、旧暦3月4日に那覇市の鏡水地区で行なわれる三月あしび。お菓子や茹で玉子で作った供え物のシンムイを、御願の後、夫人たちは順番に頭に載せて踊る。





28-29Pは、西表島・祖納集落の節祭
(シチ)で用意されたウサイ(ご馳
走)。祭場となる前泊浜の舟元では、
一人一人に振る舞われた(30P)。



【琉球弧の芸能1】

沖縄に住んでいた2年間によく本を借りに行った沖縄県立図書館で、「玉城朝薫と組踊」と題した大城学（琉球大学法学部教授）氏の講座があって聴講した。その時に、自分なりに理解してまとめたのが以下の文章。

嘗て琉球王国では、国王の代替わりがあるごとに中国から冊封使が訪れて冊封儀礼が行なわれた。

冊封使は新国王に授ける王冠を携えて来ることから、彼らの乗る船は冠船（かんせん）と呼ばれた。この冠船の渡来は1404年から1866年まであり、その間に行なわれた冊封は23回。中国から一度に500人ほどが渡来したが、船は南からの風で琉球に、北からの風で中国に帰るため風が吹くまで待たねばならず、滞在期間は4ヶ月から8ヶ月に及んだという。

冊封使が渡来すると琉球王府は前国王の弔い儀式である論祭之宴、新国王の承認儀式である冊封之宴

の他、仲秋之宴、重陽之宴、餞別之宴、拜辞之宴、望舟之宴といった7つの宴を催した。

宴では音楽、舞踊、演劇で冊封使をもてなした。これらの芸能を総称して冠船踊、或は御冠船踊という。王府は芸能を催すために踊奉行を設けたが、1718年に尚敬王から踊奉行に任命された玉城朝薫が組踊を創作。1719年の尚敬王の冊封の時に、組踊の初演を行なった。

この冠船踊の中の舞踊を、宮廷舞踊や古典舞踊と呼んでいるが、それは更に老人踊、若衆踊、二才踊、女踊に分けられる。また古典舞踊に対して、明治20年代以降に創られた舞踊を雑踊と言う。

冊封使をもてなす目的として、音楽も発展した。御座楽（うざがく、おざがく）と呼ばれる琉球王国の室内楽だ。当時の琉球王国には中国から帰化した人々の子孫、久米三十六姓と呼ばれる人々が住む久米村があった。彼らは国王の命令を受けて中国（主に福建）に留学し、中国語や音楽等の中国文化を学んだ。御座楽を伝承した楽師も、久米三十六姓の人

が多かったようだ。御座楽は現在、首里城公園のイベント「新春の宴」で鑑賞することができる。

また、室内楽である御座楽に対して、国王の行列が行進する際に演奏される路次楽（るじがく）がある。首里・赤田の祭祀、みるくウンケーでは、みるくの道ジュネーに子供たちの奏でる路次楽が登場する。

沖縄の祭祀では、祭りの場で生まれた民俗芸能や古典芸能などを奉納する。奉納芸能の初めは「かぎやで風」や「長者の大主」といった祝儀舞踊である老人踊が踊られる。そして黒い袴に白い鉢巻きをした若い男性による「上り口説」「下り口説」「前の浜」といった二才踊、鮮やかな紅型の衣装を羽織った華やかな「かせかけ」「貫花」といった女踊、庶民的で軽やかな「谷茶前」「鳩間節」といった雑踊も奉納舞踊の演目として登場する。

34-35Pは、首里城正殿の御庭で再現された、冊封儀式。





36



37

and more...